

板橋区 グリーンカレッジ
「文学」ミニ講座



第三回「岡本綺堂」
2020年8月

堀 啓子

はじめに



- 皆さん、こんにちは。
- お元気でいらっしゃいますか。
- 秋とは名ばかりのお暑い毎日でございます。

- お盆も明けまして、ようやくホッと一息つかれた方も多いのではないのでしょうか。
- 今年は八月二十三日が、二十四節気の処暑(しよしよ)にあたります。ここでようやく暑さも止み、涼しくなってくるという日ですね。

岡本綺堂(きどう)について



- 落ち着いて読書がしたいけれどまだ少し暑い、というこの時期に、ちょっと気を惹かれるのが、時代小説です。
- なかでも〈捕物〉というジャンルは、今も映画やドラマでも人気があります。
- その先駆的作品を発表したのが、明治生まれの劇作家・小説家の岡本綺堂です。
- 綺堂は和と洋、両方の知識があったことから、イギリスのシャーロック・ホームズの物語も愛読していました。

『半七捕物帳』



- そこからヒントを得て、江戸版のシャーロック・ホームズ、〈目明しの半七〉を生み出します。
- 『半七捕物帳』は、半七親分の活躍を描いた六十八の短編から成る作品です。
- 大正六年から二十年にわたり発表され、野村胡堂の『銭形平次捕物控』と共に、捕物ブームをうみだしたのです。
- 目明しとは犯罪捜査のために私的に雇われた人々です。
- そのため『半七捕物帳』には、ミステリーの要素も含まれます。

半七の魅力



- どの作品も不思議な謎から始まり、ときには怪異に感じられる要素もあるのですが、最後にはすっきりと解決されていきます。
- それは、主人公の半七が「正直な淡白(あっさり)した江戸っ子風」であり「誰に対しても親切」な人物だからでしょう。
- どの作品にも穏やかで柔らかい雰囲気漂い、読後感もさわやかです。

じっさいの地名で身近に



- 『半七捕物帳』には、いろいろな地名が登場し、我々にも身近に感じられます。
- 最近では、この作品に登場する土地をたどって、散歩をできる案内本もいろいろと出版されています。
- 皆さんがお住まいの近辺が登場する作品もあります。
- この作品は小説から舞台へ、そしてテレビやラジオのドラマになっても人気がありました。その一端を少しご覧に入れましょう。

右が『朝日新聞』(大正六年七月二十六日)、
 左が『読売新聞』(大正十二年五月六日)の
 掲載広告。『朝日』には「夏の好讀物」という
 一節も見える。



岡本綺堂作 橘さゆめ装幀 四六割表紙木版手摺敷度劇箱入美本定價七十五錢送料八錢
 ▼發兌 東京神田錦町三の六 平和出版社
 振替東京八七七番

最新刊 江戸探偵物語 半七捕物帳

再版 德川末期頃を舞臺として半七が捕物帳に記せる二階のお化師匠半七の怪と女中等の不可思議なる事件探偵せるか千變萬化一讀心膽を寒からしめ或は豫想意外にお可笑味あるなま一讀再讀飽く事なき夏の好讀物を如何に
 岡本綺堂作 橘さゆめ装幀 南榮堂刊六百頁表紙木 定價八錢
 劇曲作家として第一人者たる綺堂氏の快心の劇曲十種を集めたる者悉く清
 部の劇場にて好評を博せる氏獨特の史劇艶物は讀で無限の興味を添ふ
 白虎隊隊々木高橋平家慶助支丹島島夜半曲入典父袋書歸來阿蘭陀船新朝日紀千葉突

岡本綺堂 半七捕物帳 第一輯
 本美製上頁百四版六四 錢廿圓貳金價定 錢貳拾金料送

新刊 發兌 江戶時代の隠れたるシャロツク。ホームズを紹介した半七捕物帳が我が日本に於ける代表的の探偵物語であることは今更説明するまでもあるまい、幕末の暗い江戸を背景として幽怪妖麗の事件人物が如何なる秘密を包んで如何に活躍するか、短篇にして又長篇を兼ねたる一種の連續的探偵物語の大作を見よ
 内容
 一 お化師匠 石燈籠 湯屋の娘 春の雲解 踊平の死
 二 筆屋の娘 湯屋の二階 朝顔屋敷 踊平の死
 東京目暮里谷中本十八 振替東京四三八七番
 新作社發賣 東京神田錦町一ノ一 振替東京五四七六七
 文行社

『読売新聞』掲載関連記事

大正十二年六月二日(書評)

◆半七捕物帳第一輯(岡本綺堂著)
布装三九一頁二冊二十錢市外日暮
里谷中本一八新社。「お文の魂」
外十篇の探偵小説を収む昨今流行
の翻譯物とはまた別種の快味があ
る犯罪追跡の態度が彼は科學的秩
序的であるに對して此は館くまで
も天才的突發的であるだけにロマ
ンスとしての興味が一層自由に誘
發される然も幕末の江戸で鳴りし
た名探偵半七の懷舊談と云ふに於
て當時の大江戸の風俗なり迷信な
り一般世相なりが例へば浮世繪に
あるやうな時代趣味を伴奏して讀
者に一層の親しみと懷しさを痛感
させる

大正十五年二月十四日(演芸)



「半七捕物帳」(新橋演舞場)
二番目三河町半七住居の堀の菊五郎の半七です。

病除けの話も...



- いかがでしたか。
- 『半七捕物帳』の作品のひとつに『地蔵は踊る』という話があります。
- あるお寺のお地蔵さまが踊るという奇妙な話です。
- ちょうどコレラが流行っていた時でしたので「この踊りを見たものは、今年のコロリ(コレラ)に執り着かれない」という噂が広まっていき、ひとつの事件が起きるのです。
- 今の我々にもタイムリーなテーマですね。

おわりに



- 『半七捕物帳』には、四季折々の風物詩も登場します。
- この時期の朝顔や桔梗などもとても風流に描かれ、半七自身も花好きだったようです。
- なかなか外出もままならない今の日常ですが、ふとした折に目にとまる風景には、心和むものも多いです。
- 日常をはなれた時代小説の情緒に、ひと休みして皆さんも、どうぞお元気でお過ごしください。
- 早く教室でお目にかかれますことを願っています。
- ではまた次回に。

